

乳歯⇒牙

－出会うことと責任を負うこと－



【陸前高田教育支援チーム「まつ」第2回打ち合わせ】

12月23日、「まつ」の第2回の打ち合わせが行われました。まず、地元の千田勝治さん（市議会議員・第10区（モビリア地区）自治会長）のご尽力により、「まつ」の事務所がモビリアの仮設住宅（5-1）に暫定的に確保していただけるようになったことが報告されました。拠点ができるということは、人や物が集まる場所ができるということにつながりますから、「まつ」の活動の始動に弾みがついていくような予感のする報告でした。続いて行われたのは、会則の検討です。NPO化を視野に入れつつ、任意団体として公的に認められるための会則は、打ち合わせの中でも重要な案件となりました。

話し合いの中で、主に話題になったのは「活動の目的と事業」でした。一つの柱は、これまでEd.ベンチャーが担ってきた「被災学校の教育環境の復旧・整備」を引き継ぐことですが、もう一つの柱として検討されたのが「被災した子どもたちの見守り支援」です。震災後9ヶ月を過ぎて、3月11日が近づいて来ると、被災で家族を失ったり、友だちを失ったりした子どもたちが、どのようにその時のことを振り返るのか、そうした子どもたちを、周囲にいる大人はどのように見守ればいいのかといった不安は、被災した地域で子どもと関わる仕事をしている教師にとっては、特に大きくなっている印象を受けます。そして、それが義務教育学校に在籍している時は、それでも「誰かそばにいる」という感じがあるものの、その先はどうなるのかというように考えをめぐらせ始めれば心配ばかりが大きくなるといいます。そのような心配や不安を多少なりとも受けとめられる活動ができないものだろうかという話になりました。何せどこかにモデルがあるような事業ではありませんから、「何をすればいいのか」「何ができるのか」「責任をどこまで負えばいいのか」などをめぐって、いろいろなアイデアや考えが出ましたが、最終的には「活動しながら少しずつ考えていこう」ということになりました。

あわせて2月の第1週には、学校支援対象としている小友小中学校、広田小中学校、気仙小中学校、米崎小中学校を対象とする「第1回学校支援連絡会」を開催し、地元で広く会員を募る活動に入っていくこととなりました。

Ed.ベンチャーを通して被災地支援をされて来られた皆さまも、今後は教育支援チーム「まつ」の活動を通しての継続的な支援をお願いしたいと思います。「まつ」の会則・会員申込・振込先等については、現在、第2回の打ち合わせを受けて調整中ですので、整いましたらあらためて詳しく紹介させていただきます。

また、大和市立柳橋小学校 PTA よりお預かりした義援金（28,212円）をお渡しし、ニーズにあった物品を学校に入れていただくようお願いしました。支援の具体的な品物については、購入に際してあらためて連絡しあうことを確認いたしました。

【市川富美雄一座十萬石浦ライオン隊】

たった1回の公演のために1000キロの道のりを旅して、大阪から市川富美雄一座とナニワプロモーションの安達さん達、総勢9名が万石浦入りしたのは、12月24日

の夜10時をもうまわった時間でした。折から降り出した雪に、道路もうっすらと白くつもり、高速道路は通行止めにもなった中での強行軍だったようです。クリスマスイブの夜でしたが、明日の公演のために、日付が変わっても遅くまで準備が続きました。

今回の支援は、万石浦ライオン学校の子どもたちと市川富美雄一座がタイアップし、仮設住宅に生活する高齢者の人たちを招待してのビッグイベント、「大衆演劇の世界」の成功が目標でした。

土曜日は、子どもたちが集まるとすぐに、チラシくばりで仮設をまわりました。一月前にもチラシくばりにまわったのですが、なぜか今回は留守の家が多く、仮設住宅自体がひっそりとしています。みんなどこに行っているのだろうか、明日はお客さんが来てくれるのだろうか・・・そんな不安がよぎります。それでも明日の準備の仕事はたくさんあります。係に分かれて、大看板作りや横断幕、会場の飾り付けや演目の表示をつくります。墨で看板に大胆に字を書く子どももいれば、看板や横断幕に貼る装飾を、折り紙を使って丁寧に作っている子どももいます。紙テープによるカラフルなチェーンもできました。絵も描き込みました。そして、来てくれるであろう仮設のおじいさんやおばあさんに、みんなで手紙を書きました。「カゼをひかないで下さい」



「来年はいい年になりますように・・・」。思い思いの言葉が書き込まれました。「司会・あいさつ」担当の子どもたちは、文を作って練習をしました。始めは恥ずかしそうでしたが、見違えるように大きな声が出るようになりました。お客さんに配るお茶菓子セットをつくって手紙を入れたら、もう4時になる時刻。みんなよく働きました。こんなに長時間、集中して作業ができるなんて、驚きでした。もちろん途中で飽きて、外に「脱走」してしまう子どももいましたが、それでも、スタッフに声をかけられると、自然に作業を手伝います。一日の振り返りをする時間もなく、明日の確認をして解散しました。その夜遅く到着した座長や安達さんが、壁に立てかけられた看板や横断幕を見てとても喜んでくれている頃、子どもたちはきつとぐっすりと眠りについていました。

公演当日の朝は、一座と安達さんのたつての希望で、支援に初参加した2人の中学生も連れて石巻と女川の被災状況を見て回りました。市川富美雄一座は、家族で構成されています。座長と奥さんと5人の子どもたち。一番年上の高2の長女から、一番下の6歳の女の子まで、二男三女の家族です。前日はほとんど寝ていないにもかかわらず、朝6時半の出発に全員が参加しました。被災された人たちに何を伝えることができるのか・・・そんな思いを抱えながら、被災の状況に言葉を失っていらっしやいました。一座の真摯な姿がよく伝わってくる朝でした。

前夜の天気とは打って変わってこの日は晴れ。子どもたちもいつもよりも早めに集合してきました。風に飛ばされないように看板を針金で縛ったり、会場を片付けて客席を

セットします。接待の流れを打ち合わせしている横では、準備完了のマイクに向かって司会が練習を重ねています。今日は、招待した側として、大人のようにふるまわなければいけません。そんな緊張と不安が子どもたちの顔には表れています。授業参観をのぞいたとき、一時間中、クラスの誰とも目を合わさず、一言も言葉を発しなかった女の子は、ライオン学校でも一番年上なのに、いつも男の子達の攻撃的になってしまおう・・・でも、司会の大役を強引に説得され、練習しているうちに、みるみる表情が変わってきていた女の子は、「一人で練習してくる」といって、サポートセンターの一番奥にあるお風呂場にこもり、全身でその責任を果たそうとしています。



開演の40分も前に初めてのお客さんが4人連れでやってきました。「どうしたらいいの?」「できないよウ。」弱音を吐く接待係のお尻をたたいて、お客さん一人ひとりの前に立たせます。「席まで案内します」「甘酒はいかがですか?」「このお茶とお菓子は公演を見ながら召し上がって下さい」。やがてどんどんお客さんが増える中でてんでこ舞い。お客さんがちょっととぎれると、「つかれた～」と寝ころぶほどに神経を張っていたようです。

公演の第1部は、ライオン隊の司会と挨拶で始まりました。その立派だったこと!! お風呂場で練習していた女の子も、堂々と自信を持って司会ができました。そんな姿に、5月に初めて出会った頃、避難所を訪れるようになった私たちに見せていた荒れた姿をふっと思い出したりして、胸がちょっぴり熱くなるのを感じます。昨日の準備にしる、今日の接待や進行にしる、どの子もいままで隠していた力を、ここぞとばかりに爆発させているようにさえ思えるライオン隊の姿なのです。

公演は、市川富美雄座長の「にらみ」から始まりました。魔を払う力を持つという「にらみ」を被災した人々に送りたいという気持ちが、朝にまわった被災の現状から、より強く市川座長の心をとらえていたようです。歌と踊りと歌謡ドラマ、その一つひとつを観客のお年寄りや子どもたちは楽しんでいました。午後の第2部には、1部に引き続き顔を見せてくれたお客さんも多くいて、違う演目を楽しんでいました。飛び入りで参加することになった支援隊のスタッフも観客を沸かせて大役を果たし、それを見ていたライオン隊まで舞台に上がりたそうにしていました。

大成功! 仮設住宅に生活する83人のお客さんが見に来てくれました。そして、ライオン隊の一人ひとりが、今までとはちょっぴり違う自分を手に入れることができました。

お客さんが帰ったあと、静かになったサポートセンターで、一座の人たちと子どもたちは初めてゆっくりと顔を合わせました。しっとりとした時間が流れる中で、双方が感謝の気持ちを伝えました。自分たちと同じ年齢の子どもが、一人前に大人の前で踊り、演技する姿をライオン隊の子どもたちはどのように感じたのでしょうか。そして、被災の状況とそこに住む人たちに出会って、市川一座の子どもたちは何を考えたのでしょうか。同じ時代を生きる人としての出会いが、やがて豊かな未来をつくり出す力と



なってくれることを信じています。市川富美雄一座の皆さま、ありがとうございました。ライオン隊の子どもたちに、ちょっぴり牙が生えた二日間でした。(この日の朝、司会をした一人の女の子の乳歯が一本抜けました・・・!)

【支援隊活動記録 12月6日～12月28日】

■陸前高田学校支援

○12月23日(第29回)教育支援チーム「まつ」の第2回打ち合わせ、山十支払い
□支援隊メンバー:清水睦美(東京理科大学)、家上幸子(Ed.ベンチャー事務局長)柿本隆夫(引地台中学校)

□教育支援チーム「まつ」を通しての物資提供:広田小学校(マイネム・長縄飛び、ニューカー、総計42376円)、広田中学校(キホルダー、総計2394円)、小友中学校(紙・インカートリッジ、トナリ総計46704円)、八起プロジェクト(スクラップブック・領収書・クリップ・消しゴム他、総計51,763円)

■石巻市万石浦子ども支援

○12月24日～25日(第18回)万石浦ライオン学校の地域イベント

□支援隊メンバー:柿本隆夫(引地台中学校)、家上幸子(Ed.ベンチャー事務局長)、清水睦美(東京理科大学)、松永雅文(大和市特別支援教室)、福島正彦・高柳恭介・宮澤葵(引地台中学校)、内藤順子・吉間里衣(大野原小学校)、今井美里・大林沙紀・甘利悠貴・古浦新司(東京理科大学学生)、藤原弘輝・岡亮太(引地台中学校生徒)、ナニワプロモーション、市川富美雄一座

■ご協力いただいたみなさま(敬称略、順不同、物資・寄付を含む)12/7～12/26

大和市立柳橋小学校PTA、藤田武志(日本女子大学)、水原勝弘・鬼沢明子・鈴木孝(大野原小学校)、岸本比佐子、眞田敏樹(会社員)、柿本隆夫(引地台中学校)、清水睦美(東京理科大学)、今村久美子・鈴木宏美・富裕潤子・行田康恵・鈴木敦子・荻窪京子・三好富恵・前田貴恵子・吉田美佳・橘川眞知子・相澤智恵子・三澤律子・吉川清美・田中善廣・岩滝敏子・渡邊和幸・徳増有子・佐藤章一・福田佑哉・森西みどり・前田拓郎・清水紫・吉田慈・清水美希・眞田岳志・菊池伊都子・馬場明寿美・扇子喜幸・鎌田達雄(大野原小学校有志)

【支援感想よせられた感想】

いつも「東日本大震災支援通信」お送り頂き有難うございます。今回のNo.25号外①②における被災されました学校の校長先生や職員の方からの報告は、震災当日の厳しい現実やその後の困難な状況に改めて触れる事が出来ました。私自身、原点を風化させないように時々読み直していきたいと思います。心していきたいと思います。寄稿文、有難うございました。又、できる範囲での支援をさせていただきたいと思います。(手塚文雄)

今後の継続的な支援の活動のために広く寄付を募っております。

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援 (Ed.ベンチャーヒガシニホンダイシンサイシエン)

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和中央林間 3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

